

平成31年度 研究の概要

1 学校教育目標

「豊かな心と自ら学び続ける力をもち、たくましく生きる子どもの育成」

2 めざす児童像

考える子 なかよしの子 じょうぶな子

3 本年度の重点目標

- ① 分かる授業，主体的に取り組む授業の実践
- ② いじめのない楽しい学校作り
- ③ 自ら行動できる児童の育成
- ④ 開かれた信頼される学校づくり

4 研究主題

一人一人が輝き，共に学び合う
～対話的な「聴く」「話す」ことを通して，学びを深め，生活を豊かに～

5 研究主題設定の理由

(1) 今日の課題から

学校の教育活動において、「生きる力」を育むために、創意工夫を活かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎・基本となる学力はもちろん、「活用力」を身に付けるために必要な思考力、判断力、表現力とともに、主体的に学習に取り組む態度を養うこと、そして、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められている。

(2) 今までの研究と児童の実態をふまえて

本校には多くの児童・教師がおり、さまざまな児童・教師・地域の人々とかかわりがもてる。そのため、多様な価値に触れ、交流することの楽しさを味わいながら、学び合うことができる。また、オープンな造りの校舎を活かした授業づくりも容易にできる環境にあり、教師の経験・力量・個性の違いを活かして、協働で児童を育てていくことにより、さらに教育効果を上げてきた。そして、児童一人一人が互いに認め合い、学び合うための土台として、「聴く」「話す」の重点指導を行ってきた。

昨年度は、研究のサブテーマである「対話的な『聴く』『話す』ことを通して、学びを深め、生活を豊かに」に迫るため、以下の3つの柱を設定し、取り組んだ。

- ① 課題・場の工夫（授業のデザイン力）
- ② 教師の姿勢（授業の対応力）
- ③ 系統的な『聴く』『話す』（系統的に）

この柱にそって各学年に応じて学習形態や指導の工夫を行うことにより、相手を意識して聴いたり話したりできる児童が増えてきた。また、特別活動などの授業外でも、児童が型にとらわれないような話合いができるような場を意識的に設定することで、対話的なかわりが見られるようになった。教員間では、「なかふじ先生 WEEK」で互いの授業を見合う風土づくり、共に学び合う教師の協働を進めることができた。

しかし、対話的な「聴く」「話す」を実践する中で、「深い学び」がまだ十分に実現できているとは言い切れない。また、子どもが実生活の課題にぶつかった場面でも、対話的に解

決する話し合いができない子もいる。

昨年度の課題を踏まえ、今年度は、より「深い学び」に迫るため、新たに学習部会（①授業作りグループ②環境・調査グループ③道徳グループ）を編成し、それぞれの視点から手立てを考えていきたい。これらの取り組みを通して、学びをより深め、学校生活を豊かにしていきたい。

6 研究の内容

（1）研究主題のとらえ方

「一人一人が輝く」とは

- ・子ども一人一人が、**自己存在感**を味わえるような教育環境の中で、大切にされること。
- ・学習活動に意欲的に取り組み、**主体的な学び**の中から、**学ぶ楽しさや喜び、達成感や成就感**をつかみ取ることができること。
- ・自己を表現したことが集団の中で**価値あること**として認められ、もてる力を発揮できること。

「共に学び合う」とは

- ・他とのかかわりを楽しいと感じ、**かかわり合うことの価値**に気付くこと。
- ・一人一人が**自分の考えをしっかりと**、**話し合い**に参加できること。
- ・一人一人の願いや思いや活動が、さまざまな仲間や先生、地域の人と**協働**することで深まっていくこと。
- ・自他の体験の共有により、**豊かな体験**に裏打ちされた見方・考え方ができるようになること。

（2）研究の3つの柱

①課題・場の工夫（授業のデザイン力）

子どもたちが、対話的な「聴く」「話す」をするためには、子どもたち自身が話したくなるような課題が大切である。教師が様々な課題の設定を工夫することで、子どもの意欲を駆り立て、話すことの必要性を感じることができるだろう。また、教師が日常的に「聴く」「話す」場を設定することで、子どもたちは経験を積み重ねていくことができる。昨年度まで取り組んできた様々な学習形態やツールを継続して用いて、話し合いの活性化、可視化を図っていきたい。

②教師の姿勢（授業の対応力）

まず、教師自身が、子どもにとってよいモデルとなっていきたい。子どもの声を聴き、どう応え、反応していくのか。そして、子どもの思考を深めるために、どのようにして声かけをし、働きかけ、価値付けていくのか。今一度、教師の姿勢・立ち振る舞いを考えていきたい。また、授業や子どもとの関わりを気軽に見合い、フィードバックし学び合うために、なかふじ先生WEEK（全学年・年一回・一週間公開）を実施する。

③なかふじの「聴く」「話す」（系統的に）

子どもたちが、課題を追究し、深めるために、6年間を通してどのように指導していけばよいのか、中藤小学校の児童の実態に合わせて考えていきたい。そのためには、発達段階に応じたポイントを考える必要がある。低学年は話型を指導する必要があるが、6年生になっても話型に頼っているようでは対話的とは言えない。自分の考えをもち、発信し、応答し合う関係を作るための基盤を考えていきたい。